

フラナリー・オコーナーの “A Good Man Is Hard to Find” 祖母と「もう一人の息子」

井 上 一 郎

Flannery O'Connor's "A Good Man Is Hard to Find"

- The Grandmother and "one of my children" -

Ichiro INOUE

(序)

かつて Flannery O'Connor は、“A Good Man Is Hard to Find” を「六人家族がフロリダヘドライブに行く途中、ミスフィットを自称する一人の脱獄囚によって全員が殺される話」¹⁾と要約し、さらに「この物語で気をつけなければならないのは、祖母の魂の中で起こった恩寵の働きかけとかそのようなものであって、決して死体などではありません」(MM, 113)と述べたことがある。しかし、田舎の道路際で次々に殺されていく無辜の家族五人のことに注意を奪われない者はいないだろう。彼らはカフカの小説の主人公のように、「まるで犬のように」殺されていったのである。それでも、オコーナーは、読者の注意を祖母に釘付けにし、祖母の中で起こる目に見えない精神的変化を見逃さないようにと警告を発したのである。特に、祖母がその男に向かって、「あなたは私のもう一人の息子だね!」(“You're one of my own children!”)²⁾と呟き、彼の体に触れようとした行為については、「それがなければ物語は成立しない」(MM, 111)とさえ言い切ったのである。このようなオコーナーの言葉には、すべての不条理の感覚を黙らせ、ひたすら読者の目を「祖母の魂の中で起こった恩寵の働きとかそのようなもの」に向けさせようとする作者の強い意図が明白である。そして、従来この作品についての多くの解釈が、intentional fallacy の危険性を意識しながらも、概ねオコーナーの意向に沿ったものであったと言える。

しかし、こういった解釈が、それこそ作品の中に宗教的寓意性を見つけだすことに「注意を奪われて」、多くの安易で薄っぺらな批評を生み出してきたことも事実である。それから逃れる唯一つの方法は、この作品が南部小説の一つとして持っている豊かな時間と場所のリアリティをもう一度取り戻すしかない。現にこの家族はアトランタの喧噪を車で脱出し、ジョージア州の田舎を通り抜けて保養地フロリダ州までの道のりを、まさしく地を這う旅を企てたのである。「朝の8時45分」(CS, 118)に家を出発したベイリーの車は、祖母がこっそり記録した数字、「55890」(CS, 118)に恐らく多くのマイル数を加えていたことが想像される。

この小説からリアリティを奪う努力をしているのは、実は、この家族自身なのである。彼らは事故を起こし、ミスフィットに出会うまでは、自ら進んで南部の現実を無視し続けた感

がある。孫のジョン・ウエズレーとジューン・スターは、近代化から取り残された醜悪なジョージアの風景にわざと目を閉ざし³⁾、一方、祖母は眠りこけてしまい、南部の美しい「過去」の夢を見ることに余念がなかったのである。フロリダが象徴する南部の輝かしい「未来」に意識を奪われて、そこに到達しようと急ぐあまり南部の「現在」を無視しようとしたのがベイリーの家族であるとするなら、テネシーに残された南部の「過去」にしか自分を発見できずに南部の「現在」に目を閉ざしたのが祖母であると言えるだろう。

精神に分裂を抱え、不適応を告白するミスフィットは、北部文明の影響を受けて急激に変化する新しい南部の精神的現実そのものである。家族は自らの故郷南部の現実を知る必要がある。その意味で、一家が早晚ミスフィットと遭遇することは避けられなかったのである。

「恩寵」を目指して旅立った祖母の魂が、エルサレムの聖キュリロスの言う「道端の竜」(MM, 35)の前を通過する物語であるとするのが、この作品に対する従来の解釈であったが、ここでは、先ず、ベイリー家とミスフィットを可能な限りアメリカ南部の時間と場所の中に取り戻し、祖母がミスフィットに向かって最後に言った言葉、「私のもう一人の息子」の意味を考察したい。もちろん、ミスフィットが祖母の本物の息子ではないことは分かっている。日常性の領域がそこまで犯されることはない。しかし、新しい南部の現実の意味が明らかになれば、その祖母の言葉が象徴的な意味を持っていて、そのことが彼女の魂の問題の解決にも貢献していることを示すのが小論の目的である。

(1)

祖母と「もう一人の息子」のミスフィットとの出会いについて考察する前に、まず、この小説が祖母とベイリー、つまり、本物の母親と息子の関係を扱ったものであるという事実を思い出す必要がある。“Greenleaf”(1956年)、“The Enduring Chill”(1958年)、“The Comforts of Home”(1960年)、“Everything That Rises Must Converge”(1961年)など、オコナーはこの基本的な人間関係を軸に多くの優れた短編小説を書いたが、これらの作品は共通して、両者の間の精神的葛藤と対立を扱っている。特に、同じ「旅」をモチーフにした“Everything That Rises Must Converge”の主人公、ジュリアンは、ベイリー同様、都会で母親と同居中の身であり、ベイリーと全く同じ閉塞した精神状態に置かれている。彼も「母の数少ない楽しみ」(CS, 405)を満たしてやるために、YWCA主催の「減量教室」(CS, 405)へバスで向かう間中、母への不満を募らせるのだ。60年代に入って書かれたこの小説の中で、ジュリアンと彼の母が南部の人種問題をめぐって対立していることは誰の目にも明らかであるが、ジュリアンを苛立たせているものの正体は、実は、人種問題とか彼に自己実現を容易ならざるものにしてしまった社会そのものというよりも、むしろ、その社会の現実を正しく認識しようとしない母親の存在ではなかろうか。

母親との同居は、ベイリーにもジュリアンにもいわば存在の在り方について分裂をもたらしていたのだ。母親たちの時代錯誤は、息子達が未来に向かって自己実現を試みるのを妨げると同時に、輝かしい過去への憧憬を呼び覚まして止まないからである。ジュリアンは母が自慢する祖父の館について話す時は、「軽蔑」(CS, 408)を込めて話したのに、自分自身がそれを考える時は、「憧れ」(CS, 408)を抱いたと書かれている。自己実現を阻まれ、慢性的に無気力な人生を送ることを余儀なくされ息子たちが、昇華しきれない鬱屈した怒りを向

ける矛先は、母親たちの時代錯誤に他ならない。

旅に出発した時のベイリーの怒りは、丁度、祖母が籠に入れて車内に持ち込んだ猫の Pitty Sing のように、大人しくしている。なぜなら、祖母は、テネシー行きを諦めて、家族と一緒にフロリダへ行くことに同意したからである。しかし、祖母の時代錯誤が本来目指した先は、テネシーであり、彼女はそこに残っている親戚を訪ねることによって、失われつつある南部「レディ」(CS, 118)としてのアイデンティティを回復することを狙っていたのである。したがって、祖母の願望もまた、今は、猫の Pitty Sing のように、大人しくしているのである。しかし、隠された願望、欲望を容易に満たすことのできる場合は、普通、夢の中にあり、その夢を祖母は見ってしまったのである。それは、一家が昼食に立ち寄ったレッド・サム(Red Sam) の店を出発した後のことである。

The grandmother took cat naps and woke up every few minutes with her own snoring. Outside of Toomsboro she woke up and recalled an old plantation that she had visited in this neighborhood once when she was a young lady. (CS, 123)

日常性の感覚を失う危険性を秘めたものが旅だとすれば、その旅の途中での「昼寝」(cat naps) はさらに危険であると言わざるをえない。アトランタの都会をさまよい、「披露困憊して眠りこんでしまった」(CS, 262) “ The Artificial Nigger ” (1955年) のネルソン少年は、目を醒ますと、唯一人頼りにしていた祖父ヘッド氏の姿がどこにも見えないのに気付いて動転する。彼は文字通り方位感覚を見失い、それが祖父との関係の新たな現実に入入する契機となるのである。祖母の場合、目を覚ますと車の窓の外は、テネシーに変わってしまっていた。息子のベイリーが運転する車がジョージアを通過している間、祖母は一人だけ、心地よいまどろみの中で故郷のテネシーへと運ばれて行ったのである。彼女は夢の中で、自分が若かりし頃、ロマンスの花を咲かせたテネシーの農園屋敷を見たに違いない。なるほど、祖母は「昼寝をした」というだけで、「夢を見た」と実際には書かれていない。しかし、引用文にもある通り、「Toomsboro の町を出ると、彼女は目を醒ました」にすぐ続いて「古い農園屋敷のことを思い出した」となっていて、彼女は眠りから醒めると同時に、夢の世界の内容をそのまま現実の世界に移し替え、そこに住み続けようとしたとしても不思議ではない。

(2)

祖母が目指す「古い農園屋敷」は、彼女が若い頃、Mr. Edgar Atkins Teagarden (E.A.T. 氏) から南部「紳士」(CS, 120)たちと「デートを繰り返した場所」(CS, 123)であり、結局は氏と結ばれなかったために懐かしさと悔恨の情が交差する場所である。彼女にとって、そこは栄光と追憶の場所であり、また、彼女の人生の挫折の原点でもある。彼女はベイリーにそこを目指して車を走らせるように命じるが、夢の中で見た「農園屋敷」への道草は、彼女にとって失われた過去を取り戻す行為、実現されるはずだった E.A.T. 氏との優雅な人生を回復させるためのささやかな代償行為にすぎない。

比喩的に言えば、その「農園屋敷」までの距離こそが、祖母が振り返り、取り戻さなければならない時間の長さをあらわしていると言えるであろうが、果たして、祖母はどれほどの

年齢の女性だろう。孫のジョン・ウエズレーイが「8才」(CS, 117)であることを手がかりにすれば、ベイリーは30才代の前半となる。そうすると、彼女といえども60才に手が届くかどうかという年齢になる。作品発表の年(1953年)から逆算しても、彼女は前世紀の終わり、つまり、Henry W. Grady がスローガンとして掲げたが、結局は神話として終わってしまった「新南部」(“The New South”)に生まれ、E.A.T. 氏と同じように南部が急激に変化を遂げていった第一次世界大戦後を大人として生きてきたことが推測できる。

その後のE.A.T. 氏の消息は、祖母によれば、「コカコーラの株⁴が最初に売り出された時にそれを買って、最近死んだ時には大金持ちだったんだよ。だから彼と結婚しておくべきだった」(CS, 120)ということだ。しかし、ベイリーの父親についての言及は、“A Good Man Is Hard to Find”のどこを探しても見つからない。だが、ベイリーの父親像については容易に察しがつく。逆に考えれば、彼女はE.A.T. 氏のような「紳士」ではなく、「金持ち」でもないある男性と結婚したということに他ならないのだ。つまり、その男性は、たとえ、E.A.T. 氏と同じく「紳士」であったにしろ、彼ほど戦後の時代の変化に乗じて金儲けをする世もなく、従って、祖母には南部「レディ」としてのプライド(アイデンティティ)を確保してやれない別の男性だったということになる。

さて、祖母が目指す「農園屋敷」は、最初からここジョージア州にあるはずもなかった。恐らくテネシー州にさえもはや存在しないであろう。“Everything That Rises Must Converge”のジュリアンの母がもう一度戻りたいと思っている祖父の「農園屋敷」でさえ「もはやない」(CS, 408)からである。息子のジュリアンが自分の目で確かめた頃のその屋敷は、幅の広い正面の階段も取り壊された無惨な姿を晒していて、中には何と「黒人たちが住み着いていた」(CS, 408)のである。美しい幻想の内実を巢食っている醜い現実、ベイリーの母の場合でも同じである。麗しい思い出のテネシーの「農園屋敷」を求めて車でいくら走り回っても、そこにあるのは「汚らしい」(CS, 119)だけのジョージアの田舎だけである。祖母の失われた過去を象徴する「農園屋敷」も、南部紳士のE.A.T. の姿もどこにも見あたらない。代わって一家の前に忽然と姿を現すのは、レッドネックの倅(せがれ)のくせに南部「紳士」を装う男、犯罪者のくせにインテリらしい姿をした男、つまり、分裂と不適應の言葉で表される現代南部の現実を代表するミスフィットである。

(3)

ミスフィットは、祖母とE.A.T. 氏の間でできた子供の世代に所属し、息子のベイリーとは同年代であることが推測される。⁵⁾ミスフィットは、第一次世界大戦後、南部を北部の物質中心の文明が席卷し、伝統的な価値を破壊し尽くしていった時代に生まれ育った。レストランの主人のRed Sam が嘆いてみせたように、「善人はなかなかいない」(CS, 122)時代の申し子である。彼に言わすれば、もはや、ガソリン代金をツケにしてやれるような相手が少なくなった世代である。ミスフィット自身が振り返るように、「人生のどこかで何か悪いことをしでかして、刑務所に送られた」(CS, 130)としても不思議ではない。

しかし、だからといってミスフィットは、「世俗社会のシンボル」⁶⁾、あるいは、「悪の見本」⁷⁾として祖母の前に登場したわけでは決してない。そもそも、ミスフィットは、単なるミスフィット(不適應者)アウトローではない。彼が自分のことをミスフィットと呼ぶの

は、「自分がやった悪いことと自分が受けた罰とを一致させることができない」(CS, 131) という「不公平感」からだと言う。それでいながら、彼はいくら考えても自分が受けた罰に匹敵するだけのどんな「悪いこと」をしたのか「今日に至るまで思い出せない」(CS, 130) と言いつつ、「当局は俺に関する書類を持っている」(CS, 131) ということも認めているのである。

ではミスフィットのアイデンティティの不確かさの原因はどこにあるのだろうか。それは、祖母には及びもつかない程の現実に対する認識の深さに起因していると言わざるをえない。人類史上のどこかで「誰か」が過ちを犯し、それがそのまま処罰されないで放置されたままになっていて、この人間世界の奥に実在する謎が解明されないかぎり、いつまでもミスフィットは自分の「不公平感」を解決できないし、またこれからもミスフィットであり続けなければならないだろう、と思っている。ミスフィットが問題にしているその「誰か」とは、他ならないイエス・キリストのことだったのである。

ミスフィットはイエスが自分と同じように何か「犯罪」を犯した、と主張しているわけではない。しかし、ミスフィットが言うには、イエスが一回だけした行為——死者の復活は、世の中を震撼させたミスフィットの犯罪行為の数々と同様、人間を「バランスを失った」(CS, 131) 世界に住まわせることになった。人間は以来、救いの問題に関して理性的判断の限界を越えた次元において理解するように常に求められているのである。その意味でイエスの責任は重いと言うのである。ミスフィットは、人間を代表して、あたかもエイハブ船長のごとき積年の恨みと憎しみを込めて神を告発するのである。

“Jesus was the only One that ever raised the dead,” The Misfit continued, “and He shouldn’t have done it. He thrown everything off balance. If He did what He said, then it’s nothing for you to do but throw away everything and follow Him, and if He didn’t, then it’s nothing for you to do but enjoy the few minutes you got left the best way you can by killing somebody or burning down his house or doing some other meanness to him.” (CS, 132)

イエスのした行為、死者の復活をミスフィットは「イエスはそれをするべきじゃなかった」と告発している。イエスは「するべきじゃなかった」ことをして、人間に対して背負うこともできない大きな課題を突きつける結果になってしまった、とミスフィットは考える。ミスフィットの言う「失われたバランス」とは、イエスが人間、特に現代人に突きつけた課題の大きさを言っているのである。

このように大胆さと稚拙さの入り交じった論理を展開するミスフィットのことを、Brown-ing, Jr. は、ドストエフスキーの小説に登場する主人公たちの「プアホワイト版」⁸⁾と命名したが、たしかに、ミスフィットはイエスに対する告発の根拠を、『カラマーゾフの兄弟』のイワンが「大審問官」の物語を通して弟のアリョーシャに語り聞かせたのと同じ人間の本質的弱さに置いていることが理解される。人間の本質的弱さとは、「もしおれがその場にいたらそれを見ただろうし、そしたらおれは今みたいな人間にはならず済んだだろう」(CS, 132) とミスフィットが素直に認めているとおりのことである。つまり、イエスの奇蹟を信じて、「一切を投げ捨ててイエスに従う」ためには、実証性と科学的合理主義に支配された現代人には特に過重な要求であり、それはかえって人間を絶望へと導くというのである。早

く言えば、イエスの奇蹟は、人間の絶望の生みの親である、というわけである。

“I was a gospel singer for a while,” The Misfit said. “I been most everything. Been in the arm service, both land and sea, at home and abroad, been twict married, been an undertaker, been with the railroads, plowed Mother Earth, been in a tornado, seen a man burnt alive oncet I even seen a woman flogged.” (CS, 128129)

「俺はほとんど何でもやった」という彼の言葉は、絶望感の中で呻吟する南部を含めた現代世界の諸相を徹底的に見、聞き、経験したことに対するただならぬ自信の現れである。ミスフィットは自分の中にあるのと同じ絶望感に与した他の人間たちの群れを証拠として提出することによって、イエス・キリストの犯した「犯罪」を証明し、自分の無神論者としての人生の正当性を主張しようとしているのである。

(4)

本来、脱獄犯に「銀縁のめがね」は似合わない。しかし、ミスフィットにはそれが似合うのである。ミスフィットの「銀縁のめがね」は、祖母に「どこか学者のような」(CS, 126)という印象さえ与えた。「めがね」は、「知」の獲得のための道具であり、「銀縁のめがね」には「知」の獲得のプロ、つまり、「学者」を思い出させて当然である。さらに、「私は物事を見通して、虚無を見てしまったのよ」(CS, 287)と聖書売りの青年に向かって宣言する“Good Country People”のハルガも「めがね」をかけている。彼女のような「哲学者」にとって、究極の「知」はニヒリズムに通じていて、「銀縁」とは書いてないが、彼女の「めがね」は無神論哲学との関係を示唆している。しかし、果たしてハルガのような哲学書に頼る空論家でもないミスフィットについて、この「銀縁のめがね」が彼のニヒリズムをストレートに表していると言えるだろうか。

“A Good Man Is Hard to Find”の前年に書かれたWise Bloodの無神論者のヘイズ(Hazel Motes)も銀縁のめがねを持っている。しかし、それは彼が18才になって軍隊に入隊した時、それを使って聖書に書いてある事実(fundamentals)を徹底して学ぶようにと母親が手渡したものである。軍隊でその「めがね」を使わなかったことが、彼を逆に徹底した無神論者にしたと言って良い。⁹無神論者のヘイズには、その「めがね」はもはや必要ないはずだが、彼はそれを今でも自分の持ち物として肌身離さない。

つまり、オコーナーのニヒリストたちに共通して言えることは、彼らはすべて南部土着の保守的なキリスト教を精神母体として持っていて、彼らがかけている「めがね」は、ヘイズの「めがね」のように、もともと「親譲り」のもので、近代的な科学知識の獲得のための「道具」とは言えず、むしろ、近代的な科学知識とは全く無縁のファンダメンタリスト的な信仰を受け継ぎ、それを守るための道具であるはずだったのだ。彼独特の「銀縁のめがね」をかけて、

“Yes mam,” he said, “finest people in the world... God never made a finer woman than my mother and my daddy’s heart was pure gold.” (CS, 127)

と、父と母のことを表現したミスフィットの言葉は、あながち諧謔ばかりとは言えず、故郷のファンダメンタリストの父母のあるべき姿について語っていると考えることもできるのである。

科学的合理主義と非科学的なファンダメンタリズムは、一見、類縁性がないように見えるが、実は、頑ななまでの実証主義 (literalism) という精神を共有しているのである。両者の違いは、証明すべき事実が聖書的な事実であるか、科学的な事実であるかに過ぎない。「イエスが言った通りのことをやった」(CS, 132) かどうかを確かめるためには、2000年近くも遅く生まれてしまったと嘆くミスフィットは、ファンダメンタリストの血を引きながら、自らが現代の科学的合理主義の僕 (しもべ) であること暴露していることになる。「見たり、手に持ったり、味わったりできないようなものを信じるのは正しいことではない。」と言ったのは Wise Blood のヘイズであるが、ミスフィットも Ted R. Spivey が言うように、「彼は存在論的に自分で証明できないものは、いかなるものも真なりとして受け入れることができない」¹⁰⁾のである。溝の中に車ごと「二回転しましたのよ」(CS, 126) と事故の様子を説明する祖母の言葉に対して、「一回転じゃないか。おれは見てたんだぜ。」(CS, 126) とムキになるのは、その意味でミスフィットらしいのである。

現代科学文明の洗礼を受けた南部の精神風土は、ミスフィットの父親のご託宣通りミスフィットやヘイズのような「鬼子」(“different breed”)(CS, 128) を生み出す可能性を大いに秘めているのである。大人になったミスフィットが展開するイエスに対する告発は、親譲りのファンダメンタリスト的な固い信仰と、それを困難なものにして止まない現代科学の合理主義、この二つの抗い難い力を知り尽くした者の悲痛な呻き声に他ならない。ヘイズをはじめオコナーの主人公たちが、この二つの精神の狭間 (はざま) で激しい振幅を描くのも当然と言えよう。

ジョージアの田舎道で祖母の前に姿を現した時のミスフィットに信じられるものは、2000年前にイエスがしたと言われる行為 (死者の復活) ではなく、今、自らが手を下す犯罪行為だけである。かといって、その積み重ねる犯罪行為の向こう側にも何の意味 (「楽しみ」)(CS, 132) も発見することのできない無神論の虚無主義者である。ヘイズが伝道師として、都会の Taulkinham の映画館の前で現代人の偽の敬虔主義 (pietism) の仮面を剥ぎ取り、彼らの精神の空洞に無神論を吹き込もうとしたと言うなら、ミスフィットは同じことをジョージアの田舎道で祖母に対して行っただけである。ミスフィットは、金品や命を奪う恐怖のアウトローでありながら、その一方で、“if He didn’t...” という難問がいまだ解けないまま無神論の福音を伝え続ける伝道師に他ならない。

(5)

祖母の目にもミスフィットはどこか弱々しげで、自信が無さそうに見えた。それもそのはず、彼は無神論の伝道師に姿を変えていながら、その一方で誰かに「追われる」身の上であるからだ。

“Yes’m, somebody is always after you,” he murmured.

The grandmother noticed how thin his shoulder blades were just behind his hat because she was

standing up looking down on him. “Do you ever pray?” she asked. (CS, 129)

ミスフィットは「連邦刑務所」(CS, 117)を脱走したのだから、「当局」(CS, 129)から「追われる」のは当然であろう。しかし、本当に「追われる」と感じているのは、この場合、彼の魂である。そして、ミスフィットの魂を今でも「追いかける」のは、ちょうど *Wise Blood* のヘイズが子供の頃、ファンダメンタリストの祖父に教えられたように、自分が流した血を辿って人間の罪を「どこまでも追いかける」(WB, 22) イエス・キリストである。この強迫観念は、世界を彷徨い無神論者に姿を変えたつもりのミスフィットだが、彼の魂の奥に今でも「ファンダメンタリストとしての召命」(“fundamentalist imperative”¹¹)の意識が生きていることの証拠である。今までのミスフィットは、“if He didn’t...” という仮定を胸に、ひたすら「追いかける」イエスから逃れて続けてきた逃亡者にすぎなかった。

ミスフィットがこの絶えず「追われる」不安から逃れるための唯一の方法は、自分を追いかけているイエスからの逃亡を諦めること以外にないであろう。ヘイズはどうか？ヘイズは、パトロールの警官が自分の車を破壊するのを見るや、「新しい都会での『キリストのいない教会』の伝道」(WB, 205)を諦めた。逃亡を諦めるということは、自分を「追いかけて」続けてきたイエスと直接向かい合うということを意味している。それは、彼ら南部出身の無神論者たちにとっては、精神の母体である故郷に戻ることでもある。世界を放浪した無神論者パーカー (“Parker’s Back”) が遂に田舎に戻り、選りに選ってファンダメンタリストの説教師を父に持つサラ・ルツと結婚したようにである。南部の田舎は、人々がイエスが人間の為に流した血の意味を知り、イエスの奇蹟を「事実」としてそのまま信じる場所であり、科学の時代に生きる現代人特有の病(やまい)である懐疑を取り除いてくれる場所である。ミスフィットにジョージアの田舎を徘徊させ、白昼、道路際でイエスだの、救いだのと議論をする気にさせたのは、故郷の南部の田舎が持つ精神風土に他ならない。

祖母の前に姿を現した時のミスフィットは、無神論の福音を伝える凶悪な「伝道師」であったが、自分の人生については自信(「俺は助けは欲しくない。」)(CS, 129)と不安(「人生に楽しみを(意味)を見いだせない」)(CS, 133)が交錯している。むしろ、先の引用文で示した通り、「追われる」不安に怯え、無防備な姿を祖母にさらけ出す時間のほうが多いのだ。ミスフィットにとって祖母は、「母」であり、そこに彼が生まれ育った故郷の精神風土を探し出せる相手ではなかった。ミスフィットが一家の中から祖母だけを選び出し、最後まで手放さなかった(殺さなかった)理由もそこにある。

しかし、祖母がミスフィットに対して与えられるものは、何もない。今までの時代錯誤も、そして、今またジョージアの現実よりも道草を食いテネシーの幻想の中を彷徨うことを選んだロマンティシズムも、ミスフィットが抱えて生きて来た不安を取り除き、「一つの場所に落ち着き、安心した生活を送る」(CS, 129)ようにと説得するには、あまりに無力である。それどころか祖母の答えは、ミスフィットにとって痛烈な皮肉となってしまった。なぜなら、それはある意味で彼の迷いを一瞬にして解消したばかりか、彼が心の中に抱いていた「一縷の望み」(If He did what He said...)をも粉碎してしまったからだ。

“Maybe He didn’t raise the dead.” (CS, 132)

ミスフィットは、祖母の精神の中に遂に探り当てたものが、自分のものと全く同じ種類の現代の病（やまい）であることを遂に知る。それは底なしの懷疑であり、彼にとっては、故郷の喪失である。無神論者を名乗りながら、一方でイエスに「追われる」人生の隘路からは、ミスフィットはいよいよ脱出の方法はなくなった。彼は我を忘れ、拳で地面を叩きながら、かすれ声で祖母に悩みを訴える。その時に、オコナーが「祖母の魂の中で起こった恩寵の働きとかそのようなもの」は起こったのである。

「神秘」は、祖母の「頭の働きの冴え」(CS, 132) として起こった。祖母の人生を貫くものは時代錯誤であり、南部の現実に対する徹底した「無知」(innocence) をもって彼女は自己の存在証明としてきた。過去のロマンティックな世界への気晴らしの旅をして彼女が発見した自分とは、今、目の前にうずくまっているこの男と同様、精神の内側に虚無を抱えた存在であることを知ったのである。自分の前に立ちほだかり、悩みを訴えるミスフィットを同じ現代の南部に生きる自己の姿として知ること、つまり、ミスフィットを「もう一人の息子」として認知しようとしたのである。ミスフィットを、

“Why you’re one of my babies. You’re one of my children!” (CS, 132)

と、祖母が呼んだ象徴的な意味をそこに見出したい。

(註)

- 1) Flannery O’ Connor, *Mystery and Manners* (Farrar, Straus & Giroux, 1969), p.109. 以下、本書からの引用は、MM と略して頁数のみを記す。
- 2) Flannery O’ Connor, *The Complete Stories* (Farrar, Straus & Giroux, 1982), p.127. 以下、本書からの引用は、CS と略して頁数のみを記す。
- 3) 兄のジョン・ウエズレーは「あんまり見ないですむよう早くジョージアを通り過ぎようよ。」(CS, 119) と言う。
- 4) コカコーラ社は、1919年に最初の株を一株\$40で売り出した。
- 5) ミスフィットの父は「1919年に流行したインフルエンザ」(CS, 130) で死亡している。作品の発表年から単純計算して、彼は34才は過ぎているということになる。
- 6) Dorothy Walters, *Flannery O’ Connor* (Twayne Publishers, 1973), p.72.
- 7) William S. Doxey, “A Dissenting Opinion of Flannery O’ Connor’s ‘A Good Man Is Hard to Find’,” *Studies in Short Fiction*, 10 (1973), p.98.
- 8) Preston M. Browning, Jr., *Flannery O’ Connor* (Southern Illinois University Press, 1974), p.58.
- 9) 我々の前に登場するヘイズは「俺はイエスの存在を信じない、たとえこの列車の中にいたとしても」(*Wise Blood*, 16) と断言して憚らない。
- 10) Ted R. Spivey, *Flannery O’ Connor: The Woman, the Thinker, the Visionary* (Mercer University Press, 1995), p.123.
- 11) Robert H. Brinkmeyer, Jr., *The Art and Vision of Flannery O’ Connor* (Louisiana State University Press, 1989), p.160.